

# 大学教育のDX

(デジタル・トランスフォーメーション)

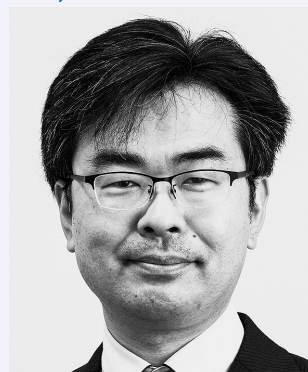
千葉商科大学人間社会学部 学部長 教授

**鎌田 光宣**

KAMATA Mitsunobu

**プロフィール**

2004年豊橋技術科学大学大学院博士後期課程修了。博士（工学）。同年千葉商科大学専任講師就任。2020年より人間社会学部学部長。情報処理安全確保支援士。著書に『はじめての人間社会入門』（中央経済社）など。



本稿の執筆時点（2021年1月）において、新型コロナウイルス（COVID-19）の感染拡大は収まる気配がない。2020年初頭から全世界的に感染が拡大し始め、緊急事態宣言が発出されるなどの混乱の中、本学（千葉商科大学）は2020年度春学期の授業を全てオンラインで実施することとした。夏頃には新しい生活様式が提案され、事態がやや落ち着いたようにも見えたこともあり、秋学期は学生に少しでも対面での学修機会を提供すべく、ゼミナール科目を中心に一部の科目を対面で実施した。多くの教員にとって遠隔授業自体が初めてのことであり、戸惑いながらも情報共有し、試行錯誤を重ねている。

本学では数年前から学内者向けのポータルサイトを運用しており、その中にLMS（学修管理システム）の機能が組み込まれている。このシステムにより、講義資料の配布、課題の提示・回収・フィードバック等を行うことができる。これだけでも遠隔授業は可能であったが、幸運だったことに、ちょうど2020年4月から、教職員と全学生を対象としたMicrosoft 365のサイトライセンスを契約したところであった。そのため、WordやExcel、PowerPointを用いた演習課題を出すことができ、さらにはMicrosoft Teamsを用いたファイル共有、チャット、ビデオ会議を利用した授業を行うことが可能となり、授業の実施方法に選択肢が増えた。対面授業に比べて大きな制約がある中での授業運営であったが、努力の甲斐あって、それなりに高い満足度を得られた科目もあった。

さて、「デジタル・トランスフォーメーション」(DX)という言葉がある。2004年にErik Stolterman氏が提唱したもので、テクノロジーの発達が人々の生活を改善することを指す。IPA（情報処理推進機構）では「デジタル技術の活用によって企業のビジネスモデルを変革し、新たなデジタル時代にも十分に勝ち残れるように自社の競争力を高めていくこと」と説明して

いる。教育の世界もこの変革を迫られている。範囲はICT環境（情報端末、高速なネットワーク回線）から、デジタル教材などの学修リソースの開発と提供、学修ログの利活用など多岐にわたる。近年、無料あるいは安価で優良なオンラインコンテンツを世界有数の大学が続々と配信するようになり、総論的な内容から専門的な内容まで幅広くカバーされている。講義のオンライン化が進めば単位互換制度も拡充していくことは自然な流れであり、このまま何もしなければ、本学の顧客（学生）がすべて奪われてしまうことだろう。さらに、大学に通わなくても良質な教育コンテンツに触れるとなれば、大学及び大学教員の存在意義が問われる事態である。

オンラインでも満足度の高い授業とはどのようなものか。FD（Faculty Development）や各種セミナーなどいろいろな話を総合してみると、重要な要素のひとつは受講生に対するフィードバックであると考えられる。例えば、授業中にチャットで質問すると、それを見て教員が答えてくれる。与えられた課題に対して、どのように対処すれば良いか教えてもらえる。提出したレポートの評価が分かり、また改善すべき点を教えてもらえる、などが挙げられる。これはオンライン授業に限らず、教室での授業にも当てはまる。このような指導方法は教員の負担も大きく、受講生の多い講義型の授業ではなかなか実施が困難であるが、本学が生き残っていくために必要なことだろう。また、複数人で協力して挑む社会課題解決型の学修は学生にも人気があり、社会のニーズも高い。しかしながら人的リソースに限りがあり、一部の学生にしか学びの機会を提供できていないのが現状である。教職員が一丸となって変革に挑み、SA/TA（Student Assistant / Teaching Assistant）の制度を最大限に活かした新たな仕組み作りが急がれる。